

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	《aller》の語源について
Auther(s)	大高, 順雄
Citation	フランス文学 , 10・11 : 1 - 9
Issue Date	1969-04-30
DOI	
Self DOI	
URL	http://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00040894
Right	
Relation	



《aller》の語源について

大 高 順 雄

1. 1. *Ancien français* では *La Passion du Christ*¹⁾ を除き, an(n)ar は用いられず, もっぱら aler が用いられた. しかし13世紀の *Jeu de la Feuille* には variante として anons が見られる²⁾. これにたいして *ancien provençal* では an(n)ar だけが使用せられ³⁾, *catalan* でも anar が使用せられた. 他方, Portugal, España, Italia では andar(e)が現われる.

以上の点から, 《aller》を意味する aler, an(n)ar, andar(e) はどんな関係にあるかが問題となる.

1. 2. 8世紀の *Les Gloses de Reichenau* には aler の初出の例と⁴⁾, 《aller》の意味で用いられた ambulare の用例⁵⁾ とが発見せられる. それでは ambulare は aler, an(n)ar, andar(e) に共通した語源であると推定してよいか? それは意味論的には可能であるが, 音声学的には困難である. 語中において -bl- は存続するという法則に従えば⁶⁾, 正当な変化は amb(u)lare > ambler であるからである. また, 音声学的に aler を生ずるべき語は *Les Gloses de Reichenau* に見られる *alare だけであろう⁷⁾. それでは, この *alare から an(n)ar, andar(e) が生じたのであろうか?

2. 0. 現在までに aler の語源として提出せられた語を列挙すれば TABLEAU (I)のようになる. それらの各語を意味論的, 音声学的, 時代的見地から考察しよう.

2. 1. *addare < addere (gradum) は 《aller》の意味を生じ得ないし, 語頭音 *ad- は *and- とはならない⁸⁾.

2. 2. *ad-de-illa(c)+are は音声学的な推定形に過ぎず, 根拠がない.

2. 3. adire は意味的には適当であるが, 活用に変化を生じて *adare となること, 語頭音 ad- から an-, al- への変化を説明できない⁹⁾.

2. 4. *ad-iterare は意味的には可能であるが, 音声学的には不可能である.

2. 5. aditare は adire の fréquentatif として意味的には肯定せられるが, 語頭音 ad- > *and- を仮定できないので, *and(i)tare > *andare を推定できない¹⁰⁾.

2. 6. adnare はもっとも適当である. その理由は後で述べる.

2. 7. *allare < allatus < auferro は音声学的には妥当であるが, *Les Gloses de Reichenau* 以外には, 単独で 《aller》の意味に用いられた例がない. また allatus に 《allé》の意を確認することができない.

2. 8. *am(b)dare < ambi+dare は意味論的にも音声学的にも不可能である.

2. 9. *ambitare は ambire の fréquentatif として意味的には十分であるが, 音声的には andar(e) を説明し得ても, an(n)ar, aler を説明し得ない. もっとも, andain < *ambitanus < ambitus および andée < *ambitana < ambitus は音声学的に自然である.

2. 10. *ambivehitare (>andar(e)), *ambivehinare (>anar), *ambivehulare (>aler) はともに ambi と vehere の *fréquentatif* との合成語であるが、意味論的にも音声学的にも不可能である。
2. 11. ambulare は adnare (2.6.) について適当である。その理由は後で述べる。
2. 12. *anitare<anas は意味的に不合理である。
2. 13. annare は意味論的に不都合であり、音声学的には an(n)ar だけを説明し得るに過ぎない。
2. 14. *antedare は音声上 *ambitare (2.9.) と同じく andar(e), andain, andée を説明できるが、aler, an(n)ar を説明できず、意味上 *am(b)dare (2.8.) と同じく不適当である。
2. 15. enare, enatare は意味的には自然であるが、音声的には語頭音の変化 ē->a-, an- を説明できない。もっとも、catalan では12世紀に enar, 14世紀に henar が発見せられる¹¹⁾。
2. 16. *vandare<vadere は sarde に bandar として現われ、意味的には完全であるが、語頭音の変化 va->*van->an- を説明できない。さらに、italien における複雑な幹母音交替 vo, vai, va, vanno および *vadiamo, *vate の欠如が疑問のまま残る。ただし、同じ italien では facere は fo, fai, fa, facciamo, fate, fanno と活用している。
2. 17. celtique el- は al, ul- として latin al-acer, ex-ul, grec elthein, eleusomai, elauno, ancien irlandais lod に《aller》の意味を与えたが、発達途上の ambulare に加えられたため、andar(e), aler, an(n)ar が生じたと考えることは時代的に不可能である。
2. 18. celtique andag- (>andar(e)), celtique anna-(>an(n)ar), celtique a(u)la(>aler) の3語については、andag->andaF->anda->andar(e) の変化が可能であり、celte continental で -nd->-nn- が存在したと仮定すれば、andar(e) > annar も可能であるが、a(u)la (au(ferro) +la)>aler の変化は、la に《aller》の意味を想定しない限り、不可能である。このような celtique の語幹から romans の変化を説明することは、el- (2.17.) と同じく、時代的に不合理である。
3. 0. 以上のように、約20の語源はそれぞれ、あるいは意味論的に、あるいは音声学的に、あるいは時代的に不合理である。しかしそれらのうち、意味論的にも音声学的にも妥当性があり、時代的にも roman vernaculaire の時期に位置させうる語源は何々であろうか？
3. 1. 1. Bréal は ambulare の命令形が軍隊用語として使用せられたため、音が短縮せられ、その結果、ambulemus>*alamus>alons, ambulatis>*alatis>alez の変化が生じたと考えた。この考えを踏襲するのは Block/Wartburg, Elcock, Ewert, Voretzsch/Rohlf 等である。しかしこの考えでは aler の発生が説明せられるだけである。
3. 1. 2. Cornu によれば、latin vulgaire の音体系に l>n の変化が推定せられ、そこから ambulare>*ambunare, *ammunare>*amnare あるいは ambulare>*ambinare>*amminare>*amnare という過程が推定せられ、ここに生じた *amnare が、隣接した m-n におい

て、 $n > d$ という異化作用を起して、*andar(e)* を導き出し、さらに、*quando > quanno* の地域で *andare > an(n)ar* を導き出した。一方、*inde* と *annar, andar* の合成語 *ind' annar, ind' andar* は異化作用によって *aler* を生じた、という。確かに、 $l > n$ は *italien modano* ($< modulus$), *sedano* ($< selinon$) に、 $n > d$ は *ladin dumbrar* ($< numerare$), *milanais domá* ($< non magis$), *italien lampana* ($< lampada$), *amido* ($< amyllum$) に見られる。Wartburg も中部および南部イタリアに $nd > nn$ (*quando > quanno*) を指摘している¹²⁾。しかし Meyer-Lübke は Cornu の説に反対する¹³⁾。

3. 1. 3. Förster は始め **vandar* を主張していたが、Schuchardt の「頻繁に使用せられる動詞の法則外的音変化」(後述) という説に同調して、*ambulare* を採用するに至った。しかし音変化は可能な限り法則の枠内で説明しようという態度を捨ててはならない。

3. 1. 4. Körting は Thurneysen¹⁴⁾ の *celtique camminare* を出発点とした。すなわち、*camminare* とその同義語 *ambulare* とが混合して、*camminare > *ambinare > *amminare > *amnare* という変化が生じ、*latin vulgaire* でこの **amnare* と *mandare* とが混合して、*andar(e)* が生じた；一方、同じ **amnare* は南 Galia で $mn > nn$ の同化現象によって *an(n)ar* となり、北 Galia で **amer* を経て *aler* となった、という。確かに、**amnare > *amer* の変化は、*intaminare > entamer*, *seminare > semer* によって実証せられるが、**amer > aler* の変化が *-ler* で終る動作を表わす動詞 *avaler, baller, couler, rouler, voler* の類推作用によるとは考え難い。しかし、**amnare* の祖語 **amminare* は **adminare* (《*amener*》) に遡及し得るから、**amnare* は意味的に 《*amener > chasser > aller*》 という発展は可能であろう。

3. 1. 5. Schuchardt は、*ambulare* のように頻繁に使用せられる語は音声学の法則に従わず、*rhéto-roman ša < laschar, lazare* に見られるような音の省略が可能である、と論じた (Ztschr. f. r. Ph. XIII, XV)。彼は、*misculare: miscitare > rhéto-roman masdar* に準じて、(*Rom. XVII, 417*), *ambulare: *ambitare > andare* を仮定し、また *ambulare: *ammulare > *amminare > rhéto-roman amnar, prov. an(n)ar* を想定し、さらに *ambulemus > *amlemus > *allemus: aller, rhéto-roman lar* を推定する。この最後の変化における **aml- > *anl-aller* については、*sanler > wallon sonlé: picard soné, strangulare > stronlé > wallon strôle* が例として挙げられ、*andar(e) > anar* にたいしては、 $nn > nd$ が支えとなるが、G. Paris はこの $nn > nd$ を認めなかった¹⁶⁾。

3. 1. 6. Wulff は *aler, andar(e), an(n)ar* を音声学的に一気に解決するため 《*l gras, la vibrante apicule cacuminale*》 という音を推定して、それを Δ で表わし、つぎのような変化を提案した：*ambulare > amb Δ are > it. esp. port. andar(e); ambulare > am Δ ar > rhéto-rom. (am) lar, amnar; ambulare > am Δ ar > an Δ ar > prov. cat. annar, anar; ambulare > am Δ ar > an Δ Δ ar > a Δ Δ er > fr. aller*。Bovet もこの提案に賛同したが、G. Paris は、*ambulare* が《*aller*》の意味では上記の音変化を示すが、《*ambler*》の意味では正規な音変化を行なって *ambler* となり、*ambulare* と類似した語も上記の変化を示さない理由を説明する必要があると批判した¹⁷⁾。

3. 2. Rice は *fr.* aler,, *rhéto-rom.* ala, la, anna, na, *prov.* an(n)ar, *it. cat. esp.* andar(e) をすべて adnare に帰着させた。この語源は音声学的、意味論的、時代的にもっとも妥当性があると考えられる。

まず音声学的には、adnare > *lat. vulg.* annare > *fréquentatif* *annitare, *diminutif* *annulare という変化が推定される。*Latin vulgaire* において、annare は nare の消滅後単一の動詞として存在していたと考えられ、接尾辞 -itare, -ulare を持つ動詞は多く¹⁸⁾、-itare の -i- の脱落は規則的である：vindicare > vengar, *vanitare > vanter, caricare > cargar, caballicare > cabalgar, cavalgar. 従って *annitare > andar(e) も規則的である。その変化における nn-t > nd の変化の可能性は Verona と Savoia での *vannitare > vandá によって確証せられる¹⁹⁾。もっとも、*espagnol* では *métathèse* dn > nd は一般的である。また、-ulare については、*brandare, *brandire > *brandulare > *prov.* brandar, *fr.* branler; *brandire > *a. fr.* brandir の変化で確認せられるように、*annulare > *annlare > *anlare > *allare > alare > aler は規則的である。しかし Gamillscheg はこの変化における nnul > ll を容認せず²⁰⁾、Schwann/Behrens は nl > ndl を不可能とするが²¹⁾、Hatzfeld/Darmesteter は nl > ngl を可能とする：spinula > espingle²²⁾。(Post-tonique nul > ngl と prétonique nnul > nnl の相違は Neumann の時代的法則に帰せられる)

つぎに意味論的には、adnare の本来の意味 «nager à» から «aller» への変化の過程は自然である：(1) «nager à» > (2) «naviguer à» > (3) «atteindre à, aller à, venir à» > (4) «aller, venir» > (5) «aller». (1) > (2) は *russe* plyt', plávat' «nager, naviguer», *grec neo* «aller, nager», *neomai* «aller», *nissomai* «aller, venir» により、(2) > (3) は英語 *sail* «to move or go in a stately or dignified manner, SOD, 1936» によって実証せられる。さらに *roumain* a merg «aller» は *latin* mergere «nager» から由来したが、Wagner によると、*latin classique* mergere にすでに «précipiter» の意が確認せられる²³⁾。

最後に時代的には、adnare を *roman vernaculaire* の時期に位置させることが可能である。3 世紀末の *Appendix Probi* には adno, adnare の活用語尾が論じられているが²⁴⁾、これはすでに nare が用いられなくなっており、同時に nare の *fréquentatif* natare とは別な意味の adnare が存在していたことを示す。確かに adnare は «aller» の意味で Cicero, Petronius, Florus に発見せられているが²⁵⁾、Probus の時代にその意味に固定せられたのであろう。この意味の固定化とともに、adnare > aler, andar(e), an(n)ar という音声的变化が完成したのであろう。もっとも、Behrens, Horning, P. Meyer, Richter, などはこのような考えに反駁しているが、彼らのうち何れも説得的ではない²⁶⁾。

4. 0. 以上の考察から、aller の語源としてもっとも適切なのは adnare であり、そのつぎに ambulare であるという結論が導かれるであろう。TABLEAU (II) には、現代諸語の活用形、TABLEAU (III) には語源とその派生語の関係を示した。

NOTES

- 1) *La Passion du Christ*, in E. Koschwitz, *Les plus anciens Monuments de la Langue française, publ. pour les cours universitaires, II, Textes critiques et glossaire*, 5^e éd. Leipzig, Reisland, 1930: (texte original)
v. 197 aled; vv. 118, 120 anez; v. 125 anned; v. 172 annovent; v. 232 annar; vv. 320, 321 anet; vv. 382, 405 anaz.
- 2) *Adam le Bossu, Le Jeu de la Feuillée*, éd. par E. Langlois, 2^e éd. CFMA, 1951, p. 53, variante pour le v. 553.
- 3) *Der altfranzösische 'Boeci'*, hgg. von Ch. Schwarz, Aschendorffsche Verlagsbuchhandlung, Münster, 1963: v. 4 annam; v. 69 annar; v. 78 anaua *La Chanson de Sainte Foy*, éd. par E. Hoepffner et P. Alfarcic, t. I. Belles Lettres, 1926: v. 385 non'n an; v. 516 annum.
- 4) *Anciens Glossaires romans, corrigés et expliqués* par F. Diez, traduits par A. Bauer, Paris, Franck, 1870, p. 9: 188 transfretavit transalaret, 189 translivit transalavit; et cf. p. 46, p. 133.
- 5) *ibid.* p. 9, 206 pergite ambulate; p. 10, 247 successit abiit ambulavit; 265 incedentes; ambulantes; cf. p. 48
cf. Tobler-Lommatzsch, *Altfranzösisches Wörterbuch*, 3, Franz Steiner, Wiesbaden, 1956, p. 286
cf. O. Block et W. v. Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la Langue française*, PUF, 1949, 2^e éd.
- 6) E. Bourciez, *Précis historique de la Phonétique française*, Klincksieck, 1958, 9^e éd. p. 167, § 167, Rem. III
H. Rheimfelder, *Altfranzösische Grammatik, I, Lautlehre*, München, Max Huber, 1963, p. 243, § 629
E. Schwann, *Grammatik des altfranzösischen*, Darmstadt, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1963, p. 79, § 114.
- 7) Schuchardt, *Zeitschrift für romanische Philologie* (1877-) = ZRP, 1902, 393.
- 8) E. Bourciez, *op. cit.* à (6), p. 141, § 141.
- 9) *ibid.* p. 141, § 141, 2^o.
- 10) *ibid.* p. 141, § 141, 2^o.
- 11) P. Russell-Gebbett, *Mediaeval Catalan Linguistic Texts*, Dolphin, 1965, 18, 41; 60, 21.
- 12) W. v. Wartburg, *Die Ausgliederung der romanischen Sprachräume*, Francke, Bern, 1950, p. 9.
- 13) W. Meyer-Lübke, ZRP (v. 7) XV, 274 (1891).
- 14) R. Thurneysen, *Keltoromanisches*, Berlin, 1884, p. 95.

- 15) C.C. Rice, *Romance Etymologies and Other Studies*, arranged by U.T. Holmes, Jr., Chapel Hill, 1946, p. 15.
- 16) G. Paris, *Romania* XXII, 626.
- 17) *ibid.* *Romania* XXVII, 481.
- 18) W. Meyer-Lübke, *Grammatik der romanischen Sprachen*, 4 vol., Leipzig, 1890-1902, II, pp. 611-3 :
 *circuitare, cogitare, *flavitare, *miscitare, *movitare, *nasitare, *pigritare, *seditare, *sequitare, *tacitare, tinnitare, *vanitare, visitare
 *brustulare, *misculare, *orulare, *rasiculare, *turbulare.
- 19) W. Meyer-Lübke, *Romanisches Etymologisches Wörterbuch*, 3^e éd., 1935, Heidelberg, s.v. *vannitare.
- 20) E. Gamillscheg, *Etymologisches Wörterbuch der französischen Sprache*, Heidelberg, Winter, 1928.
- 21) Schwann-Behrens, *Grammatik des altfranzösischen Grammatik*, 1963, Wissenschaftliche Buchgesellschaft, Darmstadt, 1963, §186.
- 22) Hatzfeld-Darmesteter, *Dictionnaire général de la Langue française*, Delagrave, t. I, p. 158, §484.
- 23) M.L. Wagner, *La Lingua sarda*, Francke, Bern, sine data, p. 111.
- 24) cf. W.A. Baehrens, *Sprachlicher Kommentar zur 'Appendix Probi'*, 1922.
- 25) C.C. Rice, *op. cit.* à (15), pp. 18-20.
- 26) Horning, *ZRP* (v. 7), XXIX (1905), 515
 E. Richter, *Jahresbericht über die Fortschritte der romanischen Philologie* VII (1904, imprimé 1908), I, 85; IX (1905, imprimé 1909), I, 67
 Scuchardt, *ZRP* (v. 7), XXXI (1907), 123
 P. Meyer, *Romania* XXXVI (1907), 140

TABLEAU (I)

- 1) *addare
 G. Paris, *Romania* VIII, 298, 466; IX, 174, 333; XXVII, 627
 Settegast, *Romanische Forschungen* I (1882), 238
- 2) ad-de-illa(c)-are
 J.D.M. Ford, *Studies dedicated to José Leite Vasconcellos*, aité par W.F. Manning, *Language* XIII (1937), 186
- 3) adire
 Bianchi, *Storia della Preposizione 'a' ecc.*, Firenze, 1877, 97
- 4) *ad-iterare

- W.F. Manning, *Language* (1937), XIII, 186
- 5) aditare
Fleschia, *Archivio glottologico*, diretto da G.J. Ascoli, Roma-Firenze (1870-), III, 166
Diez, *Etymologisches Wörterbuch der romanischen Sprachen*, 5. Aufl., Bonn, 1887
- 6) adnare
Körting, *Lateinisch-Romanisches Wörterbuch*, 3. Aufl. 1923, Techert, New York
Rice, *PMLA*, new series, XII (1904), 217; XXVI (1911), 333
Stucke, *Französische aller und seine romanischen Verwandten*, Heidelberg bez. Darmstadt, 1902, 79
- 7) *allare
Bauer, *Zeitschrift für romanische Philologie* (1876-), II, 592
Parker, E.F., *PMLA*, XLIX, 1025
- 8) am(b)dare
Ascoli, *Archivio glottologico*, diretto da G.J. Ascoli, Roma-Firenze (1870-) VII, 535, Anm.
Marchot, *Studj di Filologia romanza* (1884-), VIII, 387
- 9) *ambitare
Bloch & Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la Langue française*, PUF, 1950 (pour andare)
Elcock, *The Romance Languages*, Faber & Faber, 1960, 126 (pour andare)
Entwistle, *The Spanish Language*, Faber & Faber, 1962, 68 (pour andar)
Gröber, *Miscellanea di Filologia e Linguistica in Memoria di Nap Caix e Ugo A.Cannello*, Firenze, 1886
W. Meyer-Lübke, *Grammatik der romanischen Sprachen*, 4 vol. Leipzig (1890-1902), I, 262
M. Regula & J. Jerney, *Grammatica italiana descripta*, Francke, Bern, 1965, 163 (pour andare)
- 10) *ambivehitare, *ambivehinare, *amvehulare
Ulrich, *Zeitschrift für romanische Philologie* (1876-) XXV, 506
- 11) ambulare
Anglade. *Grammaire élémentaire de l'ancien français*, A. Colin, 1955, 112
Bloch & Wartburg, *Dictionnaire étymologique de la Langue française*, PUF, 1950 (pour aller)
Bréal, M., *Mémoire de la Société linguistique de Paris* (1871-), XII, 5
Bovet, E., *Romania* XXX (1901)

Cornu, *Romania* XVI, 563; XIX, 283

Elcock, *The Romance Language*, Faber & Faber, 1960, 126 (pour aller)

Ewert, *The French Language*, Faber & Faber, 1943, 196 (pour aller)

Förster, *Zeitschrift für romanische Philologie* (1876-), XVI, 251; XXII, 265, 509

Gartner, Th., *Handbuch der rätromanischen Sprachen und Literatur*, Halle, 1910, §185

Körting, *Lateinisch-Romanisches Wörterbuch*, 3. Aufl., Stechert, New York, 1923

G. Paris, *Romania* IX, 174, 480

Rydberg, *Jahresbericht über die Fortschritte der romanischen Philologie*, VI (1903), I, 292

Schuchardt, *Zeitschrift für romanische Philologie* (1876-), IV (1880), 126; VI (1882), 423; VIII (1884), 529 Anm.; XIII (1889), 528; XV (1891), 117; XXII (1898), 398

ibid. *Romania* XVII (1887), 417

Thomsen, *Det philologisk-historiske Samfunds Mindeskraft, etc.*, Kopenhagen, 1879

Voretzsch & Rohlf, *Einführung in das Studium der altfranzösischen Sprache*, Niemeyer-Tübingen, 1955, 277

Wölfflin, *Die Komparation im Lateinische und Romanische*, Erlangen, 1881, 86

Wulff, F., *Romania*, XXVII, 480

12) *anitare

Behrens, *Zeitschrift für neufranzösische Sprache und Literatur*, X (1888), Leipzig, Franck, 84

13) annare

Thomas, *Mélanges de Philologie et d'Histoire offerts à M.A. Thomas*, Paris, 1927

14) *antedare

Marchot, *Studj di Filologia romanza*, VIII (1891), 387

15) enare, enatare

Cornu, *Romania*, XVI, 560

16) *vandare

Förster, *Romanische Studien* (1871-95), IV, 196

ibid., *Zeitschrift für romanische Philologie*, III (1878), 563

17) el

Schuchardt, *Zeitschrift für romanische Philologie*, IV (1879), 126; VI (1881), 423; XXII (1897), 399

G. Paris, *Romania* IX, 480

L.R. Palmer, *The Latin Language*, 1964, 21

18) andag-, anna-, a(u)la-

Thurneysen, *Keltromanisches*, Berlin, 1884, 31

TABLEAU (II)

<i>portugais:</i>	vou	vais	vai	imos	ides, is	vam
<i>espagnol:</i>	voy	vas	va	vamos	vais	van
<i>catalan:</i>	vaig	vas	va	anem	aneu	van
<i>provençal:</i>	vau(c)	vas	va(i)	anam	anatz	van
<i>français:</i>	vais	vas	va	allons	allez	vont
<i>italien:</i>	vado, vo	vai	va	andiamo	andate	vanno

TABLEAU (III)

<i>port. esp. ital.</i>	:	andar(e)	<	*annitare	<	adnare			
<i>cat. prov.</i>	:	an(n)ar	}	<	annare	<	adnare		
<i>rhétien</i>	:	anna,na							
<i>fr.</i>	:	aller	}	<	*annulare	<	annare	<	adnare
<i>rhétien</i>	:	ala, la							
<i>rhétien, istrien</i>	:	amna	}	<	*amninare	<	*adminare		
<i>macédo-roumain</i>	:	imnare							
<i>roumain-occidental</i>	:	ëmna							
<i>roumain</i>	:	îmbla, umbla	<	ambulare					
<i>roumain</i>	:	a merg	<	mergere					
<i>lithuanien</i>	:	mazgóti(r>z)							